

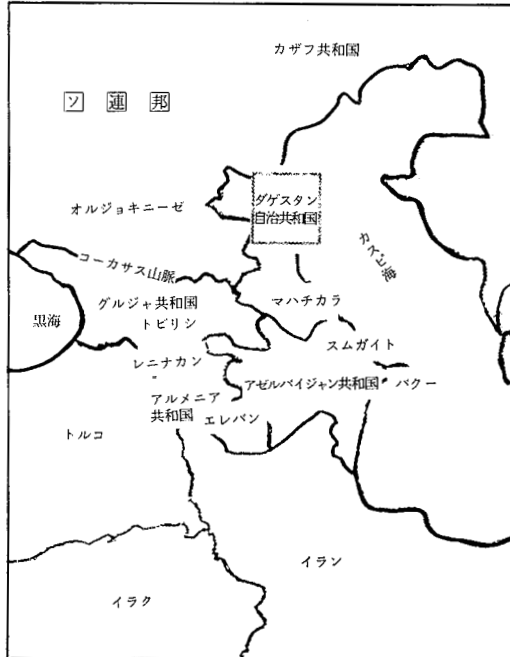
## ソビエトの民族学校におけるロシア語教育について バイリンガルの社会言語学的考察

山田 勇

まえがき

ソビエト社会に改革の機運が高まるにつれて、この国が多民族国家であるために、これまで潜在化していた問題に纏わる諸現象がいろいろな形で顕在化するようになってきた。さらに類似の事件が近隣の社会主義国にも燎原の火の如く波及するにつれて、例えば最近のハンガリー情勢に見られるように、問題によっては社会主義の根幹をも揺るがしかねぬ情勢になりつつある。ここ2、3年、ソビエト、東欧諸国ブロックで顕著な「民族間摩擦」の問題もそうした動向の一種と言えよう。多民族からなる国家では民族間の対立は恒常的で深刻な

事態を引き起こしがちであるが、中央の集権機構が、ある状況下で従来のシステムを放棄せざるを得なくなると、このヒエラルキーを構成する各々が一斉に自己主張を始める。そして新たな出口を見つけて多数者となった者が少数者を取り込んで支配の構図を塗り換えて行く。この輪廻が際限なく、また飽くことなしに感情的な側面をもはらみつづ繰り返される。コーカサスの地、グルジアで、アゼルバイジャンで、アルメニアで、



西方のバルト3国、エストニア、ラトビア、リトワニアで、さらに南スラブのセルビアで。グルジアでは悲劇は今年に入ってトビリシ、スフミ、ガグラの諸都市で連鎖的に発生した。グルジア人はグルジア共和国の、ソ連邦からの独立を求めている。しかし共和国内にはアブハジア自治共和国があり、小数派のアブハジア人が逆にグルジアからの分離、独立の要求を掲げて多数派グルジア人の牙城を脅かす。グルジア人は中央モスクワに弓を引きつつ、アブハジアの人たちの要求にも頑として耳を貸さない。事態はいわば捻れて、重層化している様に見える。

バルト海沿岸ではどうか。エストニア共和国では独立記念日に民族旗を首都のタリンに掲げるなど、エストニア人の民族意識の高揚が著しい。バルト・フィン族に属している彼らの街の雰囲気はスラブのそれとは些か趣を異にして、そこここに西欧の息吹が感じられる。彼らの目はあらゆる意味で西側に向いている。そのエストニアで非エストニア人が「族際運動」を始めた。これはエストニア語を公用語とする国語法に反対するという内容であり、ここにも小数者の権利擁護とロシア人の既得権益に対する執念が感じられる。

ユーゴスラビアにはセルビア、マケドニア、スロベニア、クロアチア、の4つのスラブ人共和国が存在する。南方のセルビア、マケドニアではスラブ特有のキリル文字を、また北方のスロベニア、クロアチアではラテン文字を使用している。これは、とりもなおさず、前者がギリシャ正教の、後者がローマカトリックの信仰という背景の相違となって現われる、この地域のスラブ人に特有な複雑に絡み合った民族事情を浮き彫りにする。チトー大統領が健在な頃は彼の類い希なる統率力によってこの複雑な民族の関係をうまく統御することに成功したが、彼の死後、もはや強力な国家の統一をカリスマの力を借りて維持することが出来ず、民族紛争の火種に事欠かない状態が存続しているのである。

さて、セルビア共和国にはコソボ自治州というアルバニア系住民が85%を占める地帯がある。州内での小数派、セルビア人は当然のこのように迫害の嵐に曝される。共和国側はこの事態に対して自治州での自治権の縮小を骨子とする共和国憲法の改定を打ちだした。これに対して州都プリシチナの近郊にある鉾山では、労働者が共和国主導による自治権の縮小に対するストを構えた。彼

らは憲法が改定されればアルバニア語の学校教育がもはや不可能になると恐れているのだ。ここにも言葉の問題が顔を覗かせる。

この様に多民族国家では言語の問題は、国家の存亡に関わるいろいろな意味合いを持つことになる。ソビエト憲法では言葉の問題はどの様に規定されているのだろうか。ここでは77年憲法での規定のあらましを追うこととする。

まず目につくのは「国家および個人」の章、第34条〔法律の前の平等〕でソビエト市民は、

A)『民族の壁を乗り越えて、社会的地位や、性別、教育、言語、宗教等の事情とは無関係に平等である』

とうたわれていることである。

続いて第36条では〔人種および民族の平等〕が、やはり言語の問題をめぐって、ソビエト市民の平等な権利の実現は、

B)『各民族の全面的発展と接近の政策や、市民の国際的な社会主義的教育によって、また母語およびソ連邦の他の諸民族の言語を使用する可能性によって』

保証されるとしている。

多民族国家ソ連邦の市民が教育を受けようとする場合、何れの言葉でそれを受けることが出来るかという問題については、第45条〔教育を受ける権利〕で

C)『市民は、教育を受ける権利を持つが、それは、教育の無償性、義務中等教育の実施、実生活で生かされた職業技術教育、中等専門教育・高等教育の広範な発展、通信教育および夜間教育、国家の奨学金・特典の提供、教科書の無償支給、学校における母語による学習の可能性等によって保障される』と明文化されている。

日常生活で我々は各種のトラブルに巻き込まれるが、その処理の手段として裁判制度がある。多民族国家では裁判制度を円滑に実施するために、使用される言語の有する意味は多大であろう。ソ連での裁判を規定している「裁判、仲裁および検事監督」の章の第159条〔裁判手続きに用いられる言語〕で

D)『裁判手続きは、連邦構成共和国または自治共和国、自治州、自治管区の言

語もしくはそれらの地域の多数住民の言語を用いて進められ、使用言語を理解しない事件担当者には、資料を熟知し、通訳をつけたり母語で発言する権利』

を保証している。

これらの条項に見られる言語に対する配慮は国家としての統一を保つために軽視することが許されないが故に条文化されているのである。換言すれば国家維持のために必要不可欠な条項であろう。例えばA), B) ではどの言語も平等に扱われることや国家の意志は事実上の公用語であるロシア語によって伝達されるとされ、C), D) の項目では教育や裁判の現場で重要な役割を演ずる言語はそれぞれの地域の多数派が使用するものでなされなければならないとされる。それでも一連の紛争が発生しているのは何故だろうか。上述の条文を一瞥する限りにおいて次のような文言に、その理由の一端が現われているように思われる。

- B) 他の諸民族の言語を使用する可能性によって
- C) 母語による学習の可能性によって
- D) 多数住民の言語を用いて進められる

民族共和国では公用語としてのロシア語は第一外国語に相当する。筆者が担当している初修外国語の例を引き合いに出すまでもなく、本人に学習の意志が希薄であればその効果の赴くところは目に見えている。プラハの街角のレストランで若者達とロシア語での意志疎通を試みようとして、小学生の頃から学習している筈の彼らが、露語に抵抗を覚えなるべく英語を使うようにしているとの返事が返ってきたという経験をしたこともある。

しかし折しも、心のペレストロイカ、「新思考」による意識革命が進むにつれて皮肉なことにソ連邦内はもとより、他のワルシャワ条約機構加盟国内でも民族自決の問題の抜本的解決という新しい視点から民族問題にアプローチする必要が生じている。従来であればワルシャワ条約機構の盟主として、自らの手で行き過ぎたとされる改革の芽を摘むところであるが、ソ連社会に確かな改革への足音が響き始めた今、今後の動向が大変注目される。新しい風はどの様に吹いているのだろうか。ソビエトのマスメディアがバルト3国のうち、リトワニ

アでの事態を苦悩を込めて冷静に報道している記事のあらましを紹介しよう。記事は記者と第一書記との民族問題に対する対談の形をとっている。

『共和国の地元民族でない人たちは（リトワニアの独立を）どう感じているのか。私たちへの投書から判断すれば、必ずしも居心地はよくない。』

『これはむずかしい問題だ。リトワニアの住民の4/5はリトワニア人なのだから問題はないと考えている人は多いのだが、私たちは以前、問題を適当にとりつくり、ひそかに進行していたプロセスには目をつぶってきた。ところがすべての民族共和国で、たとえばペレストイカ促進の問題と並んで民族語の地位の問題、それを国語として確立する問題が日程にのぼってきた今日、各個人の利益だけでなく民族全体の利益にかかわる全く新しい問題が持ち上がった。ここにも私たち独自の特殊性がある。第一にリトワニア人が80%を占め、これにさらに昔からリトワニアに住んでいるポーランド人が7-8%を占めている。残りはロシア人、ベロルシア人、ユダヤ人で昔からリトワニアに住んでいるか仕事やそのほかの理由でリトワニアに最近やってきた人たちだ。よく言うように、それぞれどのグループにも独自の利益があり、彼らは独自の綱領を持つ社会団体を結成している。ペレストロイカ支持運動は主としてリトワニア人を統合している。もっともその指導部も含めて非リトワニア人も少なくはないが、リトワニア系ユダヤ人は文化協会という独自の団体を設立した。社会主義的なペレストロイカ支持運動“統一”が現在組織中で、これにはロシア人、ベロルシア人、ポーランド人などが加入している。

リトワニア語を国語とする規定はリトワニア語を知らない若干の住民層に不満をつのらせた。これについては広い範囲にわたる討議が行なわれ今も続いている。さしあたって問題はこう定義されている。つまり、指導者として働く以上はリトワニア語とロシア語の二つの言葉を知らなければならない、と。このことは、長い間にリトワニア語を話すことを覚えられなかった指導者には一定の困難をもたらすのはいうまでもないが、そういう指導者は多くはない。

私たちは今、住民各グループの利益を審議する政府特別委員会を設立中だ。当然これにはリトワニアに居住している各民族の代表が加わる。ポーランド人を始めとして、ロシア人、ベロルシア人も、ユダヤ人も、カラムイ人（トルコ

系)も決してなおざりにはされていない。すべての民族の利益を順守し、どの民族の利益も侵害してはならない。』

この様に見てくると、多民族国家での言語政策の命運は国家の安全保証と軌を一にしていることが実感されるが、事実ソ連邦でもロシア語の民族共和国への普及のために、多大な努力が払われている。民族学校教育でのロシア語教師の養成や、これらの教師のためにロシア語教育の月刊雑誌が発行されている等、予算的にも相当な措置が払われているが、その努力の成果となると我々もこれまでなかなか窺い知れぬところがあった。ところで『民族学校のロシア語』誌(1986年 No.11)に、民族共和国に於けるロシア語教育が社会言語学的な教育方法論を基に継続的に成されるべきであるとの論文が掲載された。ダゲスタン国立教育大学に籍を置く筆者のゲ。ブルジューフ氏は同自治共和国でのロシア語の普及の様子をアンケートによるデータに基づいて分析し、ロシア語と各民族語のバイリンガルを進展させるためには社会環境の占める意味合いが重要であること、就中、家庭教育の重要性に着目している。そしてその実をあげる方法としてラジオ、テレビ放送や映画の積極的な活用を提唱している。ダゲスタンは言語の坩堝と云われる地帯であり、アヴァール人、レズギン人を始め、所謂ダゲスタン諸語と呼ばれる多数の小数民族の言語が存在するが故に媒介言語の必要性の高い地域である。本稿で言及されている語学教育に対する考え方とその社会言語学的視点は、特に初修外国語を担当している我々が教育の抛り所を求める上でも示唆に富むものであると云ってよい。尚、本稿を執筆するにあたり駐日ソビエト大使館発行の「今日のソ連邦」、プラウダ紙、朝日新聞の広報及びマスコミ各紙最新号、ロシアソビエトハンドブック(三省堂)を参考にした。

## ロシア語学習の社会言語学的諸相

ゲ. ゲ. ブルジューフ

(ダゲスタン国立教育大学)

月刊『民族学校のロシア語』誌(1986年 No.11) 所載

今日、一つの言語のその社会(ソ連社会)で担っている役割やロシア語や母語がどの様に機能しているかを考慮しなければ、学術的に妥当なロシア語教育の方法論を考えることは難しい。

そこで、ある地域、居住地におけるロシア語と母語がどの様に機能しているか、ある言語の使用者が生活し働いている社会経済上の環境と、彼らと異民族の人達との歴史的、文化的、経済的関連、いくつかの言語が接触してそれぞれの言語がお互いに影響を及ぼし合っていること、また、大衆のコミュニケーションの手段であるとか、ある民族の代表者が異民族の言語に対してどの様な態度をとったかといったことやその他の諸々の現象などは、ロシア語と民族語のバイリンガル発達を促す上での社会言語学的要素であると認められよう。

諸言語の比較タイポロジー的な研究の成果やロシア語学習の言語学的な基礎だけではそれ自体、言葉の教育法の増加しつつある要請に答えることは出来ない。どの様に現実にロシア語と民族語相互が影響し合うか、その影響が具体的な現地の諸条件とどの様に関わっているかということをもっと正確に調べてみる必要が生まれている。

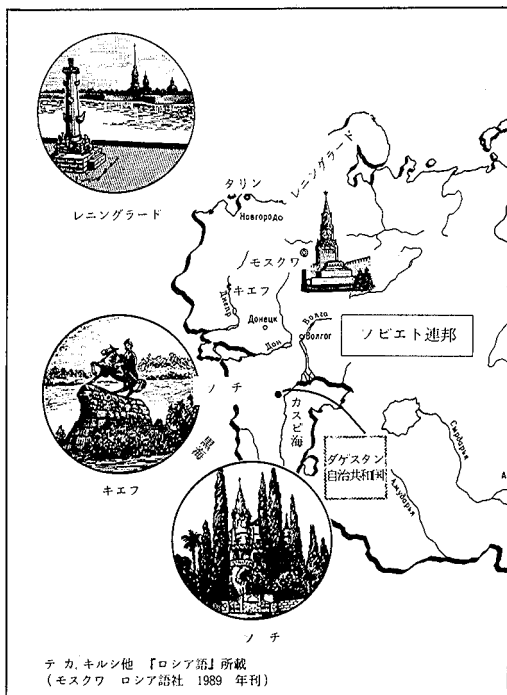
外国語を習得する場合に、実際にはその外国語が話される環境が重要な役割をすることは知られている。ロシア語を日常的に使う環境がなくても別の社会言語学的な要因がある程度この欠落部分を補うことが出来る。ダゲスタン自治共和国で行なわれた専門的な実験はこのことを裏付けている。

ソ連の民族自治共和国では最近、ロシア語の社会的機能が益々広がりつつあり、そのことがロシア語で話す環境を創り出したり、学校外でのロシア語の使用や、会話の練習の強化を促したりしている。

文化的な要素はロシア語と民族語のバイリンガルを進める上でかなり重要な条件である。例えば、農村でも子供達はロシア語でラジオを聴いたり、テレビ放送や映画を見ることも、新聞、雑誌、文芸書を読むことも可能である。子供達はラジオやテレビ放送、映画に出てきた歌、詩、会話を覚え、動画の内容をロシア語でやさしく語り直したり、イントネーションや発音を正確に再現して、正しく一つひとつの言葉の意味を把握したり、文型を習得することができる。

学習者達の箇々のロシア語を分析してみると、家族は子供達の言葉の発達に影響を与えている積極的な社会環境であることがわかる。両親の権威であるとか、日毎の両親との会話、両親の文化水準や教養、あるいは言葉の発達水準が子供達に非常に影響を与えているのである。

幾つかの研究から社会言語学的な要素が、ほとんどの家庭で、子供のロシア語での会話に絶えず影響を与えているということが判明した。これらの社会言語



テカ・キルン他『ロシア語』所載  
(モスクワ ロシア語社 1989 年刊)

学的な要素として、学童の両親や他の家族構成員によるロシア語習得の、次のような量的質的な目安が挙げられよう。

① その家族内でのロシア語及び母語の果たす役割の特徴

② ラジオ、テレビ、家庭図書館があるか、それらが使われているか、バイリンガル発達への影響はどうか

③ ロシア語の新聞や雑誌を予約購読しているか

④ 両親と子供のロシア語への関わり方

などである。



我々が調査した家庭のうちで家庭内でもロシア語を使用している率は23%である。こういう家庭に生活している子供達の発話能力は、家庭内でロシア語の会話を聞いていない家庭の子供達に比べて、押並べて著しく高い。しかしこういう子供達でも、家庭内でマネをするに足りるような模範となり得る正しい発音と正しい文法に沿った会話を必ずしも聞けるとは限らないという事実も、指摘しておく必要がある。家庭内でロシア語を流暢に操ることの出来る人が一人でもいれば、その人が学習者の言葉を吟味し、援助することも可能である。そこで先生は各自、どの家庭でどれだけの子供がこの様な援助を受けられているのかを知らねばならないし、そしてこのことを踏まえながら、両親に妥当な教育方法論上の助言を与えなければならない。

我々の研究によれば、両親が子供達にロシア語を教える時に、ラジオやテレビを努めて使うようにすると、その教育と発達に非常に大きな手助けになるのは明らかである。

こういう方針での訓練は両親や子供達が認識を深めておいた、予め編成された特殊なプログラムに従ってなされた。初等クラスの学習者は見終った放送から個々の語彙、文章を覚え、小さな断章をやさしい言葉で表現するといった課題に取り組んだ。両親は子供達の再話を聞き、発音、語彙、文法の各側面から言い誤りを正し、意見を述べるのに必要な単語を記録し、再話のための構想を立てることなどを行なった。両親には更に、ラジオやテレビの放送を録音し放送テキストを繰り返し聞き取ったものを、学習者が再話して録音テープに収め放送と再話を比較して発音、語彙、連語の学習をさせるよう助言が与えられた。

一週間に二、三回もこういう課題をこなせば十分である。学習がしだいに体系化するにつれて、子供達はそれに馴染んで行くが、両親が進めているこの様な教育方針と具体的な手法も一層充実してくる。

同様の学習は高学年で更に複雑な材料を扱って展開される。

アンケート調査の結果は両親がロシア語で書物、新聞、雑誌を読んでいる割合が36%で、52%の両親が基本的にロシア語でラジオ、テレビ放送を聞いており、両親のうち20%が手紙をロシア語で書いていることを示している。住民の前に立って母語よりむしろロシア語で演説する方が楽である人は28%と考えら

れ、32%の人々がロシア語で講義を聴いているし、仕事でもロシア語がコミュニケーションの手段となっている人は同じく32%という数字もある。

これらの資料から、ダゲスタンの人々の家族の日常生活や精神生活に於けるロシア語の比重が著しく高まり、その機能は年を追うごとに拡大しつつあるのが判る。ロシア語教師の課題は実際の授業でこれらの資料を上手に使用することである。

ロシア語が校外で学習者たちにどの様に利用されるかという点はとても興味がつきない問題である。アンケート調査した2946人のうち、654人の学童がロシア語で会話している。(これは22%に相当する。) こうして身のまわりの環境がロシア語で整備されるようになるが、教育の現場から離れたこの様な環境では、ロシア語を十分身に付けていない学童によって看過される可能性のある言葉の誤りが、他の子供達のロシア語の中に移ってしまうという若干の欠点もつきまとう。

社会言語学的要因は不変ではない。あらゆる社会的手段と同様、それらは変わり得るものなのである。バイリンガル発達の度合とそのレベルに対する言語外の要素からの働きかけは、ある程度まで具体的なその地方の環境と絡み合っている。多くの言語が交錯するダゲスタンにおいて実際の生活自体が今後、更にバイリンガルを必要とし、そのことが今度は学習者がロシア語をマスターすることに影響を及ぼすものである。

ダゲスタンでは地域によってバイリンガルの程度はまちまちである。それで当地では、学習者がロシア語を実践的に身につけるための社会言語学的要因がさまざまに作用している。

ロシア語を身につけるための最良の条件は町や鉄道に近い居住地などに存在する。これらの地域に住んでいる両親や子供達は絶えず、異民族を代表する人やロシア人住民と接触しているので、そのことがロシア語習得の刺激になる。

ロシア人でない民族の言語が借用したロシア語語源の単語の習得は本稿にいうバイリンガルを発達させるために大きな影響を与える。しかもダゲスタンの全ての文字言語、非文字言語がロシア語からほとんど同じ単語を借用しているのである。こういう事実はロシア語語源と共通なダゲスタン諸言語彙フォンド

を作成することに繋がる筈である。しかし言語のそれぞれの特徴に従って借用されたロシア語の語彙はロシア語とは異なる音声学的、文法的な変化を蒙っているため、教育に当たってはそれらを教える必要がある。

教師はいろいろな地域、居住地での社会言語学的要素や諸言語の相互作用の特性を解明出来なければならない。関連していえば、言語学的諸要素の考慮は将来、ロシア語教師が教育法を編みだしていく上で特に重要である。

教育大学のロシア語教育法課程では“民族学校学童の二言語使用とロシア語学習の深化のための社会言語学的要素の役割”が教えられている。学生達は実際の資料の蒐集とその利用に関するプログラムを受け取る。彼らの一人ひとりに、ある居住地での社会言語学的要素を学習するための具体的な課題が立てられる。

実地の授業の準備のために、学生は個別の課題を渡され、授業計画に関する必要資料を作成し報告する。例えば、彼らは二、三家族の両親のバイリンガルの度合を調べて、子供達がロシア語を身につけられるように、実際にその家族の誰が彼らを指導できるかということを描いたり、ある居住地に見られる社会言語学的要因に関する報告を準備すること、借用語の語彙が母語の影響を受けて蒙る音声学的、文法的変化を分析することなどが求められるのである。

教育実習の過程では教室内外の授業で社会言語学的要因を考慮しながら、実験的な授業も行なわれる。例えば、両親には子供達の話し言葉の発達を促すため、ラジオとテレビ放送を利用した専門的な課題が与えられる。

学生は集められた事実の資料を分析したものを基に、ロシア語学習をラジオとテレビ放送を利用して実施する方法に関する学年レポートや学術報告を準備し、小学校での実際の授業でそれらを定着させる専門性の高い教育方法に関する助言に磨きをかける。